震災から1年を通して

私たちにできること

私たち一中生は、震災直後から、何か自分たちにできることはないかということを考え、実行してきました。

昨年の3月末から4月上旬にかけて、私たちは「希望隊」と名付けたボランティア隊を組織し、活動しました。立根小学校へ行き、地域のボランティアの方々とともに吹き出しの手伝いや支援物資の仕分け作業を行いました。さらに盛川の河川敷の清掃や、猪川地区の家々を訪問し、買い物の代行などの手伝いをしたりなど、どんな小さな活動でもやってみようと心をひとつにして取り組みました。避難所になったリアスホールでは、現在の3年生全員で、被災した方々に元気になってほしいという思いをこめて合唱を披露してきました。

その後、少し遅れて新学期が始まり、5月末の運動会が終わると、校庭に仮設住宅の建設が行われました。私たちは校庭が使えなくなりましたが、それ以上に、家を失った人たちの心を勇気づけたいという思いがあり、仮設住宅の方々が喜んでくれることは何か考えました。そうして実現したのが、11月に行われた「ふれ合い交流会」でした。この会では、プランターへの花植え作業を入居者の方々と一緒に行い、その後体育館で合唱等の発表がありました。一緒に花植えをしたおばあさんが、

「本当に心の支えになってるよ。ありがとう。」と言ってくれたときの笑顔で私は逆に元気をもらいました。その他、クリスマス・寒中見舞いカードを届けたり、雪かき等の活動を行いました。

2学年では、今後どのように仮設住宅の方と関わっていきたいか意見をとりました。その中で出された意見は、「交流会や発表会の実施」「清掃活動」「運動会や文化祭に招待」といったものでした。

私たちがすべきことは、大船渡を笑顔でいっぱいの町にすることだと思います。これからも自分たちにできることを精一杯やっていきます。

希望新聞の一年

東日本大震災後、地域の人に希望を届け、元気になってほしいという思いから生まれた学校新聞「希望」。第1号を発行してから、早くも1年がたちました。この1年間をふりかえると、新聞を書き続けていく中で私たちの気持ちが変化していくのを感じました。

第一号『一中生に声をかけて下さい!!』。自分も何か役に立ちたいと思い新聞を作成することを決意しました。当時は、ライフラインが断たれていたため、一中の今後の予定なども記事にして知らせていました。また、この新聞を読んで少しでも気分転換になればと思い、何度かひなん所に配りに行きました。その時出会ったたくさんの人に、「わざわざ配りに来てくれてありがとう。」、「いつも読んでるよ。」と言っていただき、とてもうれしかったのを覚えています。それから新聞は、号を重ねるごとに全国に広まり、たくさんの"つながり"を生みだしました。

当時、ただ何かの役に立とうと始めた"希望"新聞。今、私は、この新聞を書いてきて本当に良かったと思っています。これからもたくさんの人に読んでいただければうれしいです。また、新聞を通して私たち中学生の思いを伝え、地域のみなさんとの心の架け橋になればと思います。

これからも、私たちの"希望"新聞をよろしくお願いします。

(高橋莉子)

大船渡 未来予想図

皆さんは、今後の町づくりについてどのような考えをもっていますか。私は、前期生徒会長の新沼南さんに町づくりについての考えを聞いてみました。

南さんは、住宅や学校・病院等の重要な施設などはできるだけ高台に建てるということを条令として定めることを考えているそうです。そして、すぐに避難できるように高台へつづく大きな道路の整備・防災無線の充実など、津波による犠牲者を出さない町づくりが必要だと言っていました。他にも、津波を忘れないための記念碑を作り、地域で語りつぐなど、さまざまな考えをもっていました。

そして最後に南さんは、「みんなが元気な町に復興させたい。この町に生まれて良かったと思える町づくりをすれば1番いいと思う。」と言っていました。私もそう思います。これからも復興を目指して一緒に頑張っていきましょう。